

コミュニケーションにおける非意識的介在物の効果

The effects of unconscious intermediate in communication

○荻野陽望（筑波大学大学院人間総合科学研究科）、永盛祐介（同）、小渡康行（同）、
山本三幸（筑波大学）、山中敏正（同）

1. 研究背景

他者とコミュニケーションをとる場において、空間および時間などの「環境」はその場に大きな影響を及ぼすことは経験的に知られている。そして、環境は個々人の心理に作用し、立ち居振る舞いに変化を与える要因があると考えられる。また、人間の無意識下における心理作用である「感性」もまた行動に影響を及ぼすものと言える。本研究の目的は、コミュニケーションの場において環境が感性と行動にはたらく作用について解明することとである。

本研究では、コミュニケーションの場に存在する「茶」が人間の行動に及ぼす影響について考察した研究[1]を元に、実験設備を整え解析を自動化した上で行動評価実験を行い、定量的な検討を行った。

2. 実験方法

被験者は10代～20代の親しい友人2人組を対象とした。被験者群を茶を置く組（茶あり組）と茶を置かない組（茶なし組）の2つの組に分け、それぞれに室内温度を一定にした部屋のテーブルを挟んで向かい合って座り、会話をするという環境の下で実験を行った。被験者の中央上部と側部にはビデオカメラを設置し、会話中の挙動を三次元で記録した。

茶あり組には実験前に1杯目を出し、2杯目以降は実験者が関与することなく自由におかわりができるようにした。茶なし組にはテーブル上には何も置かなかった。

会話は、被験者に画像を提示して10分間会話をするという形式を取った。画像は単なる会話のきっかけとして作用するものとして使用し、会話内容は画像に関連する事柄に限らず自由に行きつよいものとした。本実験はこの流れを1セットとして2回行った。

2セット目を解析対象とし、記録した映像について、動画解析用ソフトウェアであるPV Studio（エル・イー・ビー）により被験者頭頂部の移動を追跡し、各々の位置関係について解析を行い評価した。数値評価については被験者間の距離の平均を算出し、また被験者間距離の変動をフーリエ解析することにより評価を行った。

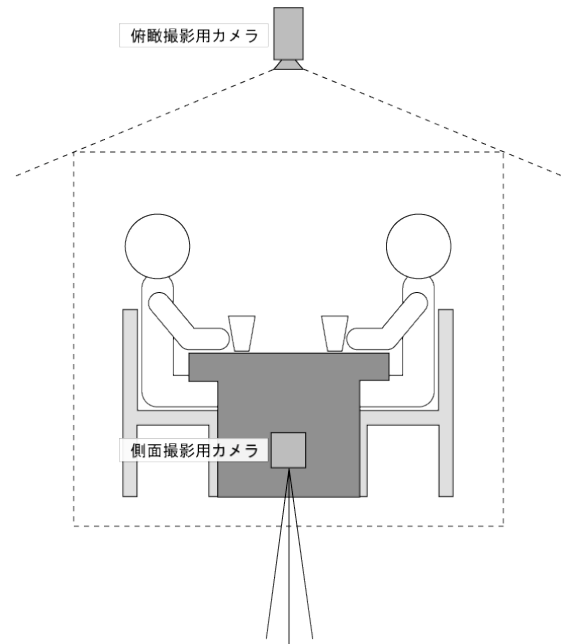


図 実験設備

3. 結果および考察

本実験により、茶あり組は茶なし組と比較して被験者間の距離が有意に小さかった。また、被験者間の距離の変動の幅が小さく、周期が長く安定しているという結果が得られた。本実験における定量的解析によってこれらの結果をより信頼性の高いものとした。

会話における相手との位置関係と、相手との親密度は深い関係を持つ、つまり親密さを大きく感じるほど相手に近づくという傾向があるという報告がある[2]。また、茶あり組は相手に視線を送る回数が増加したことから、茶を飲むタイミングを見計らう行為が、それに応じて増加したと言える。この行為が双方の親密さの高まりを表す方向にとられ、発言量が増えるという結果につながる。

今後は被験者間の距離の他、脳活動にも注目して測定を試みる。

4. 参考文献

- [1]田村塊、山中敏正：茶飲み友達に見る「場」と「コミュニケーション」の関係。筑波大学芸術学群，2002
- [2]Hall E T: The hidden dimension; Doubleday & Company, 1966